



高等遊民



川崎ゆきお

木下は友人の大宇陀が引っ越したので、そこを訪ねてみた。

大宇陀との関係はさほど親密ではなく、引っ越すことなど聞かされていない。しかし、聞いても手伝いに行くほどのものではない。

大宇陀の引っ越し先は郊外、もう田舎だと言ってもいい、そこに建つ比較的新しい空き家だ。戦前からあるようなものではない。一軒家で、坂を下った谷沿いにある。緑が多いのだが、湿気ている。そして暗い。日差しが山で遮られているのだろう。全く日が差さないわけではないが、日照時間は短いものと思われる。

「辺鄙なところに越したねえ」大宇陀の顔を見るなり、木下が言う。

「ああ、どうせ街には滅多に出ないから」

「最近どうしてるの、飲み会にも来ないし」

「もう住んでる世界が違うんだ」

「え、どういうことかな」

二人は美学関係のゼミで一緒だった。

「明治から大正にかけて住んでいる」

「え、この家、そんなに古くないでしょ」

「いや、ここじゃなく、頭の中の世界だよ」

「変なところに入り込んだの？」

「まあ、そうなんだけど、明治や大正の本を読んでいると、その世界にはまってしまった」

「ああ、読書の話か」

「精神もその影響を受け、どっぷり浸かっている」

「で、どんな感じになるの」

「時代劇でもないし、現代劇でもない。そこがいいんだ」

「大正時代って、もう今とそれほど変わらないと思うけど」

「そうだね、僕のお爺さんが生まれた時代だ」

「それで、どうして、ここに引っ越したの」

「だから市街地で暮らしていると、その風景に惑わされるから」

「コンビニとかATMとかかい」

「まあ、そうなんだ。便利になってるけど、情緒がない。だから、見たくないんだ。ただ、利用するけどね。頑固に嫌っているわけじゃなく、あまり見たくない程度。これは雰囲気壊すから」

「不自由じゃない」

「いや、昔の生活を再現させようとしているわけじゃないんだ。雰囲気だよ、ムードだよ。それを維持したいから」

「それは、一つのファッションかなあ」と、木下は言いながら大宇陀の服装を見るが、以前と変わっていない。ただ、椅子と机がなく、べた座りの文机だ。分厚い座布団の上に大宇陀は座っている。それを正面から見ると、落語や講談でも始まりそうな雰囲気だ。

「あのデスクはどうしたの」

「ああ、あれはスチールで重いから、持ってこなかった」

「そうか、言ってくれば、僕が引き取ったのに」

「畳の間で座ると、視線が低くなる。天井が高く感じる。これがいいんだ。これが」

「それで、ここでずっと本を読んで暮らしてるの」

「まあ、生活費がなくなりかけるまでね」

「それって、何かなあ」

美学仲間なので、そちらに関係付けて木下は考えてしまう。

「ただの休憩だよ」

「休憩」

「少し働きすぎたからねえ。一二年は休まないと」

「あまり忙しそうにバリバリ働いている姿、見た記憶はないけど」

「僕にとってはハードスケジュールだったのさ」

木下は、この大宇陀の様子がよく分からない。神経を病んでいるようにも思えない。いつものペースで喋っている。一人でじっとしていたいのかもかもしれない。それで、興味を失った。と言うより、訪問は邪魔だったのかもかもしれない。

木下は久しぶりに茶柱のあるお茶をごちそうになり、それを飲み干したが、茶の茎が歯に挟まってしまう。

「じゃ、このへんで帰るよ」

「そうか、またおいでよ。招待はしないけど」

「いいの？」

「漱石の吾輩は猫であるに出て来るような、高等遊民が遊びに来る……っていうのがいいんだ。木下君は、そのキャラにふさわしい」

「ああ、はいはい」

この大宇陀は自分の世界観を持っている。それは薄っぺらいものであっても、悪い感じではない。

木下は谷を上り、明るい通りに出た。振り返ると、奈落の底にある家のように思えたが、住めばまた別なのだろう。

了